

## 動画投稿サイトYouTube を活用したドイツ語授業

その他のタイトル	Deutsch-Unterricht mit YouTube
著者	齊藤 公輔
雑誌名	関西大学外国語教育フォーラム
巻	13
ページ	67-78
発行年	2014-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/9571">http://hdl.handle.net/10112/9571</a>

# 動画投稿サイト YouTube を活用したドイツ語授業

## Deutsch-Unterricht mit YouTube

齊藤 公輔  
SAITO Kosuke

Im Unterricht arbeite ich mit dem Internet-Videoportal „YouTube“. Ich nutze dieses Videoportal für Aussprachübungen und-prüfungen. Dieser Bericht beschäftigt sich mit den Vorteilen und Problemen, die sich durch die Anwendung im Projektunterricht ergeben.

Die Einführung von YouTube im Sprachunterricht bringt folgende Vorteile: Erstens kann der Lerner seine im YouTube-Format aufgenommenen Sprechsequenzen mit dem Aussprachemuster (z.B. der CD) gut vergleichen. Zweitens kann er seine Mundbewegungen bei den Ausspracheübungen beobachten. Drittens kann der Lehrer das Niveau der phonetischen Sprachfertigkeit seiner Studenten und ihre Defizite besser verstehen. Viertens kann der Lehrer viel der wertvollen Unterrichtszeit einsparen, da er auch außerhalb des Unterrichts die Möglichkeit hat, die Aussprache der Studenten zu bewerten bzw. zu analysieren.

Nachteile bzw. Probleme, die sich bei dieser Form des Unterrichts ergeben sind folgende: Die Studenten müssen für den Unterricht einigen Vorbereitungen treffen. Zum Einen müssen sie ein eigenes Konto bei YouTube erstellen, um hier später ihre erstellten Videos hochladen zu können. Da nicht alle Studenten ausreichende EDV-Kenntnisse besitzen, muss eine entsprechende Einführung durch den Lehrer erfolgen. Außerdem ist ein KU WiFi-Account für das Hochladen großer Dateien vom eigenen Smartphone, Tablet oder Notebook notwendig. Hier liegt das eigentliche Problem, da an dem Unterricht nur Studenten teilnehmen können, die entsprechende technische Geräte besitzen.

Im Unterricht nehmen dann die Studenten, meist mit ihrem Smartphone, die Videos auf. Eine empfehlenswerte Möglichkeit ist es, die Studenten paarweise bzw. in kleinen Gruppen miteinander arbeiten zu lassen. So könnten auch Studenten ohne Smartphone, internetfähigen Tablet oder Notebook am Unterricht teilnehmen. Der vom Partner laut vorgelesenen Text wird dann sofort hochgeladen und die entsprechende URL des Videos dem Lehrer zugeschickt. Damit kann nun der Lehrer die Aussprache der Studenten bewerten sowie die phonetische Sprachfähigkeitsentwicklung dokumentieren. Mit den daraus gewonnenen Erkenntnissen kann er dann sowohl individuell, als auch für das gesamte Unterrichtskollektiv ganz gezielt seine Unterrichtsmethode an den jeweiligen Entwicklungsstand der Studenten anpassen.

キーワード：ドイツ語教育、デジタルメディア教材、プロジェクト授業

筆者は2013年度春学期のドイツ語授業において、YouTubeを用いたプロジェクト授業を行った。特に発音練習に重点を置いたもので、学習者が音声入りの動画を撮影してYouTubeにアップロードし、教員がその動画を評価するというものである<sup>1)</sup>。

筆者はドイツ語教育における発音指導の難しさを痛感してきた。その原因は学習者の発音への意識が低いこと、発音に特化した教材が少ないこと、教員の後に続いて発音する方法では学習者の興味関心を維持しにくいこと、などにあると思われる。CALL教室などの恵まれた環境であれば二番目の原因はある程度は解消できるかもしれないが、環境の良さが学習者の意識改善に直結するとは限らない。学習者の興味関心を惹きながら発音を学習させるにはどうしたら良いだろうか。本稿で報告するプロジェクト「動画投稿サイト YouTube を活用した授業」は、こうした点から出発している。

このプロジェクトの実施に際し YouTube の設定など技術的な問題が非常に多く、また今後授業に YouTube を導入していくうえで事前に把握しておかなければならない問題点も少なかった。したがって、本プロジェクトの効果も大変興味深いが、マルチメディア教育のますますの充実を願う立場から本稿では特に技術面に焦点を当てて論を進める予定である。本稿はこれについて、1：取り組みの背景、2：実践の目的と形式、3：プロジェクトの実施風景、4：実施面の課題について報告する。

## 1：取り組みの背景

外国語学習の重点が、およそ1970年代以降、いわゆる文法訳読法からコミュニケーション重視へと転換して久しい。これはドイツ語に限った話ではなく、英語を含む外国語学習の大きな流れであることに異論はないだろう。しかし、少なくとも大学の初修外国語学習者において、当該言語のコミュニケーション能力がコミュニケーション重視へと転換してから飛躍的に向上したとは言い難い。筆者はその理由のひとつとして、外国語学習のなかで発音練習が徹底されておらず、これが学習者のコミュニケーション能力の向上にブレーキをかけているのではないかと考えている。

島崎・林・境(2012)で指摘されているように<sup>2)</sup>、コミュニケーション重視へ転換してから40年が経過してもなお、日本語母語話者のドイツ語発音(学習)には非常に多くの問題がある。この背景として、田中(1998)は教育現場における学習者及び教員の発音を軽視する傾向を指摘している<sup>3)</sup>。これは10年以上前の論文であり、現在の状況にどの程度当てはまるのかは注意を要するが、筆者の経験に照らし合わせる限り改善しているとは言い難い。田中(1998)は音声軽視の要因に「中学・高校の英語教育の影響で、発音など出来なくてもある程度外国語ができるようになると錯覚している」<sup>4)</sup>ことを挙げている。その結果、「学生たちは文字を見ても、発音せずに、文字と日本語の『意味』を結びつけ」ることのみ集中し、それゆえ「話された

言葉、すなわち音声言語を聴いても、そのままでは理解出来ず、そのスペルを思い出して初めて、意味が理解できるという回りくどいことになる。ましてや、その際にスペルが思い出せなかったならば、その言葉を理解できない<sup>5)</sup>」という状況に陥っているのである。

こうした状況を克服することなくコミュニケーションのための会話表現を学習しても、コミュニケーション能力が向上するとは言えない。吉井 (2000) はコミュニケーション学習における発音の重要性を、リスニング力と結びつけながら次のように指摘している。

そもそも我が国の外国語教育では、受験という大きな障壁もあり、聞き取りや発音訓練を体系的に授業カリキュラムに組み込んだ教材の開発が遅れていることは否めない事実であろう。教員自身の発音能力がほとんど問われない上に、発音の善し悪しが評価基準に含まれない現状では、当然の結果であると言えようか。しかし [中略] まず相手の発話内容を的確かつ迅速に理解することが、円滑なコミュニケーションの前提条件として必要不可欠であろう。[中略]「受動的」ないしは内容理解中心の語学教育から、発信型の「能動的」な語学教育への転換がさげばれているが、相手を見捨て、自分の言いたいことを一方的に述べたてるだけでは、だれからも相手にされないことは明白である。まさにリスニング (聴解力)こそが、ボールを投げあうような円滑な対話にとって、表現力以上に決定的に重要な要素であると言えようか<sup>6)</sup>。

したがって、何よりもまず学習者が発音の重要性に気づき、自ら発音を矯正できるように意識づけることが不可欠である。これは「発音が上手になる」ことを目指すのではない。勿論発音を上達させることが最終目標であるが、その前段階として「発音は外国語学習の重要な要素である」という認識を学習者に持たせなければ、目標達成もままならないであろう。本プロジェクトを導入した背景には、外国語学習における以上のような状況を下敷きとしている。

## 2：実践の目的と形式

本プロジェクト授業は、学習者が発音している様子をスマートフォンを用いて撮影し、その動画をアプリなどを用いて直接 YouTube にアップロードし、教員がそれをもとに採点や発音指導などを行うというものである。本プロジェクトはコンセプトや技術面において実験的な要素が非常に濃いものであり、したがって動画を用いた授業の目的、利点および技術面のポイントなどを解説する必要がある。本節ではこれらの説明を中心に筆を進め、次節で言及する授業の様子を理解するための一助としたい。

## 2-1：目的

本プロジェクトは、ドイツ語の発音練習において学習者が自身の誤りに気づき自発的に修正できる環境の構築を目的としている。上述したような発音への意識が低いことを前提に学習者が発音に意識をより集中するよう仕向けることを目指しており、その意味で本プロジェクトを通して発音が「上手くなる」ことは二次的効果と位置づけている。学習者が自ら発音へ意識を向け、正しい発音と自身の発音のズレに気づく過程を通して、発音をいいかげんにせず正しく身につけねばならないという意識を高めることを目的としている。

こうした学習者の振り返りを支援する環境整備のためには、教員による学習者のコントロールが不可欠である。齊藤・田原（2013）で挙げられている通り、学習者間のプロジェクト授業に対する温度差はプロジェクト授業遂行にとって大きな課題である。以下で触れるように本プロジェクトはペアワークを基本としているが、仮にペア内で発音への意識に大きな差が現れた場合、意識の高い学習者が不満を抱かないとも限らない。そこで成績に直結する課題を与えることで、発音の意識向上およびモチベーションの維持を同時に満たすことができると考え、今回は発音テストという形態を採用した。成績に反映されるという枠組みを与えることは学習者の取り組み意識をある程度コントロールできると考え、プロジェクトのより円滑な遂行に有効と判断するものである。

## 2-2：方法と利点

上述した目的達成のために、学習者が発音している姿を撮影することが最適であると考えた。その理由は学習者側の視点から2つ、教員側の視点から1つ、学習者教員両側から1つある。第一は、学習者が自身の発音と模範発音（教材付属CDなど）を繰り返し聴き比べることができる点である。普段、学習者は自身の発音を客観的に評価する機会は少なく、これも発音に意識が向きにくい原因の1つと考えた。そこで発音をメディアに記録することで、自身の発音と向き合う機会を設けた。第二は、口の動きを確認できる点である。[v, f]などに典型的であるが、正しい発音と口の動きは密接な関係がある。学習者もこうした事実を知識として持っていると思われるが、実際に発音する際にそこまで意識することは難しい。それゆえ発音を練習する際は口の動きにも注意させることは、発音向上の1つの壁を乗り越えることに繋がると考える。第三は、教員がすべての学習者の発音を容易に比較・確認できる点である。後述するように、撮影された動画は教員が一括で管理する。授業でしばしば実施される教員の眼前で発音する形式は、学習者の発音を1回しか聞くことができず、また学習者間の比較なども行いにくい。動画撮影し教員が管理することで、発音の指導や評価を円滑に行えるようになる。第四は、発音をメディアに保存することでいつでも見返すことが可能となるため、発音確認や採点をすき間時間に行うことができる点である。学習者にとって、授業時間外でも発音を確認できる環境は学習効果を高めるうえで有効である。また教員にとっても、授業外に採点を行うことは発音

テストの効率化に繋がる。従来の方式では、教員の前で発音をする順番が回ってくるまでの待ち時間が発生するなど、効率に欠けている部分があった。動画にすることでこうした問題が解消され、効率的な指導が可能となる。

以上、発音テストを撮影することの利点を4つ確認してきた。これをまとめると次のようになる。

動画撮影による発音テストの利点

1：発音を繰り返し視聴でき、模範との比較も容易であること
2：口の動きを確認できること
3：学習者の発音能力の把握が容易であること
4：授業時間外の学習、評価が可能なこと

特徴的なのは教員側のメリットも考慮している点にある。確かに本プロジェクトは学習者の発音意識を高めることを目的としているが、教員の指導効率を向上させることも学習者の利益になる。それゆえ教員の指導負担や評価効率の改善も、プロジェクト授業を考えるうえで欠かせない要素と言えよう。

### 2-3：技術的側面

ここでは技術的な側面について、プロジェクト授業を行う前に準備したものを中心に報告する。特に携帯端末、Google アカウント、学内無線 LAN に言及する。

第一に、動画撮影は学習者所有のスマートフォンを使用して行った。総務省の平成24年版『情報通信白書』によると、20代のスマートフォン利用者は44.9%となっている<sup>7)</sup>。学習者2人に1人の割合であるが、今回のプロジェクト授業を行うにあたり実施した事前アンケートでは、スマートフォンを所有している学習者はクラスの8割程度であった。本プロジェクトはペアワークを基本としており、どちらか一方がスマートフォンを所有していれば実施に支障はなかった。全体を通して2組だけ両者ともスマートフォンを所持していなかったが、その場合には教員のタブレット端末を貸与した。

動画をスマートフォンで撮影し YouTube へアップロードするために、若干の準備が必要である。スマートフォンには大きく分けて iOS (iPhone) と Android という二つの異なる種類があり、操作方法が異なる<sup>8)</sup>。多くの学習者にとって撮影した動画を YouTube へアップロードするのは初めてであり、それゆえ教員が方法を指南する必要がある。筆者は WEB で各 OS の操作方法を収集し、私物の Android 端末と iOS 端末を使って実際に学習者の前で YouTube に動画をアップロードして説明した。

第二に、YouTube に動画をアップロードするためには Google アカウントを取得する必要がある。Android 端末は購入時に Google アカウントの取得が必要であり、したがって Android を

使用している学習者は改めて取得する必要がない。一方のiOSはGoogleアカウントの取得が必須ではないため、既にGoogleアカウントを利用している学習者以外は新しく登録する必要がある。Googleアカウントは動画をアップロードする上で不可欠であり、プロジェクト授業の成否に関わる部分であることから、iOS利用者にアカウント取得を徹底するようアナウンスを複数回行った。

第三について、撮影した動画の容量は10MBを超えるものもあり、決して小さくない。それゆえLTEや3G回線でアップロードすることは、多くの時間がかかるだけでなく通信料金も発生するため、授業の枠組みの中で実施する上で好ましくない。そこで学内無線LANを利用してアップロードを行うことを学習者に伝達し、事前に申請するよう呼びかけた。

以上、本プロジェクトを実施する上で必要となる技術的側面について解説してきた。一見すると煩雑で、教員の負担が増える印象を与えるように思われる。しかし実際には次の表のとおり非常にシンプルであり、数回の練習で習得できるものと言える。

技術面における事前準備項目

Google アカウント	Android：購入時に取得済み
	iOS：要取得
アップロード方法	資料1 参照
無線LAN	申請しておくことが望ましい

### 3：プロジェクトの実施風景

本節ではプロジェクトを行った際の状況について概観し、何が問題になったのかを報告したい。以下で詳しく述べる通り、本プロジェクトには非常に多くの準備時間を割いている。しかし、結論を先取りして言うならば、発音テスト本番では多くの問題が顕在化してしまった。以下では本プロジェクトのためにどのような準備を行ったのか、本プロジェクトの核心である発音テストの際に何が問題になったのかを中心に論を進める。

#### 3-1：授業準備

ここではプロジェクト授業を実施するまでに行った準備について、主に授業運営の面から説明する。第一にクラス情報について、第二に学習者への伝達について確認し、必要に応じてその他注意を要した点に触れたい。なおこの際、幾つかの点で2-3の中で説明した項目と重複することをはじめに断わっておく。

はじめに本プロジェクトを実施したクラスについて概観する。本プロジェクトの核である発音テストの概略と実施クラスの基本情報は以下の通りである。



## 動画投稿サイト YouTube を活用したドイツ語授業（齊藤）

### プロジェクト内容および実施クラスの基本情報

実施期間	2013年5－6月
対象クラス	関西大学法学部1クラス、文学部2クラス、政策創造学部1クラス、社会学部1クラス ※うち、初修クラス3クラス、既習クラス2クラス
クラス人数	平均31.6人、最大43人、最少24人
実施形態	原則2人1組（クラス人数によって3人グループあり）
テスト内容	音読を撮影し YouTube へアップロード、URL を教員に送付（詳細は資料1 および2 参照）

プロジェクト授業は5つのクラスで実施した。このうち2年以上ドイツ語を学習している既修クラスは2つである。いずれのクラスもペアワークを基本とし、互いに発音を撮影しあうことと、互いに発音を訂正しあうことを課題とした。ペアは教員が名簿をもとに学籍番号の若い順に組み合わせを行った。

本プロジェクトはスマートフォンの設定や Google アカウントの取得、Wi-Fi 申請など手続きが必要であり、かつ動画を撮影して YouTube にアップロードするための練習も不可欠であることから、発音テスト実施の前に2回の予行練習を行った。予行練習は資料1のテスト手順を把握することを目的に、①端末設定、② Google アカウント取得、③動画撮影とアップロード、④ URL を教員へ送付、を体験させた。これは学習者に一連の流れに慣れてもらうことと同時に、テスト実施時に起こりうる問題を事前に把握し改善策を準備することも目的としている。なお資料1及び2は本学インフォメーションシステムの授業支援システム内に掲示し、学習者が常時参照できるよう配慮した。

この段階における最も大きな問題は、Google アカウント取得と動画アップロード、URL の送付であった。第一について、Android ユーザーは既にアカウントを獲得しているはずであるが、多くの学習者は Google アカウントの ID とパスワードを失念しており、再取得を含む対処が必要であった。第二について、YouTube への動画アップロードが完了しないケースが非常に多かった。これは Android 端末の初期設定に起因するもので、ネットワークの設定を変更することで解決した。（資料1『『アップロード保留中』対策』参照）しかし、YouTube に起因すると思われるアップロード未完了の事案も散見され、これについては現在も原因がわかっていない。後述するようにテスト時はこの現象は確認されなかったが、しかし安定したテスト実施のためには対策を立てなければならない。第三について、学習者の発音を視聴するためにアップロードした動画の URL を教員メールアドレスに送付することとしたが、学習者から教員に届かないケースが頻発した。はじめは関西大学ドメイン (@\*\*\*kansai-u.ac.jp) に送るよう指示していたが、セキュリティの関係で届かないことがあったようである。この問題は他にも様々な原因があったが、最終的に送付先メールアドレスを Gmail に設定することでほぼ決着した。



### 3-2：発音テストの実施時の様子

上述したように、発音テストは2回の予行練習を経て実施された。技術的な問題などは前項でおおよそ確認したので、本項では実施時の様子や問題ついて解説する。

本プロジェクトは教員指定のペアと進めるものであるが、2回の予行練習を経て互いに打ち解け良い関係を築いている様子である。ただし、プロジェクト実施前に「互いに発音を確認し合うように」と指示していたが、実際に発音を確認し合うことは全体を通して非常に稀であった。母音の読み違い（例えば“ei”をローマ字読みして[eɪ]と発音するなど）といった初學者でも比較的判別しやすいと予想していた発音の間違いなども、動画撮影時に学習者同士が指摘し合う風景はあまり確認されなかった。この点については次節にて再度取り上げ、改善策を模索する。

発音テストは教科書の指定ページを音読することとした<sup>9)</sup>。クラスによって多少教科書が異なるが、いずれの教科書にも模範音声録音されたCDが付属しているため、自習が容易であると判断したためである。テキストの読み方は授業中に数回指導・練習を行ったが、それ以降は基本的に授業では一切触れず学習者の自習に任せた。テスト時に学習者がどの程度発音が上達したかは次節にて言及するが、結果だけを簡潔に述べるならば、発音上達にのみ焦点を絞ると芳しい結果とは言えなかった。しかし本プロジェクトの主目的は発音上達ではないことを改めて強調しておく。

予行練習時に見られた動画のアップロードが完了しない現象も、設定を調整したことでテスト時には見られず、全体として概ねスムーズに実施することができたと言える。以下で述べるような個別の問題は散見されたが、プロジェクトの成否に関わる問題はなかった。

個別的な問題として、予行練習の時には顕在化しなかった個人に起因する問題が見受けられた。第一に、Wi-Fi申請を行っていない学習者が非常に多かった。発音テストは公平性の観点から、授業時間内に教員にURLを送付するまでを課題としていた。すでに言及した通り、動画ファイルの容量が大きいため3G回線やLTEではアップロードに時間がかかり、場合によっては授業時間内に完了することが難しい。この点を十分アナウンスした上でWi-Fi申請手続きを行うよう指示したつもりであったが、多くの学習者が申請しておらず、最終的に授業時間外にアップロードが完了しURLを送付した。

第二に、YouTubeへのアップロード方法を習得していない学習者が若干名ながら確認された。予行練習時にきちんと習得していなかった場合がほとんどであるが、中にはGoogleアカウントを取得していない学習者もいた。こうした学習者には教員のGoogleアカウントのIDとパスワードを代用させるなど可能な限り対応を試みたが、やはり授業時間内に完了しない場合が多かった。

以上二つのケースは、予行練習の時に徹底した指導を行えば回避できたはずであり、事実その観点から折りに触れて言及してきた。それでもなおWi-Fi申請漏れやアカウント未取得があ

ったということは、何らかの理由があると判断せざるを得ない。次節において再度検討したい。

#### 4：実施面の課題

以上 YouTube を活用した授業プロジェクトについて、実施の準備と問題点を中心に概観してきた。全体としてプロジェクト実施に大きな問題はなかったが、予行練習を2回実施するなど十分な準備期間を設けたにもかかわらず、Wi-Fi 申請漏れやアカウント未取得など学習者個人の問題が見受けられた。また、プロジェクト内における発音改善について、学習者においても教員においても改善すべき点が明らかとなった。今後も YouTube を用いた発音プロジェクトを授業に取り入れていくことを視野に、本項ではこうした問題の防止策などに言及する。

第一に Wi-Fi 申請漏れやアカウント未取得について、アナウンス回数よりもアナウンス方法に気を配るべきであったと考えている。筆者は授業毎に口頭でアナウンスを行うと同時に、授業支援システムに掲示することで周知徹底を図ってきた。しかし、授業支援システムを活用している学習者は非常に少ない様子であり、結果として口頭のみでの伝達になっていたようである<sup>10)</sup>。また Wi-Fi 申請について、どこでどのように申請することができるのかを案内していなかったことも申請漏れに繋がったのではないかと考えている。今後は授業毎の口頭アナウンスおよび授業支援システムに加え、ペーパー配布と板書も併せて行いたい。

第二に、ペアの組み合わせ方法を見直す必要性を感じている。今回採用した学籍番号順に組む方式は、何よりも学習者に緊張感を持たせるための措置であった。しかしその結果として、発音の間違いを指摘し合うなど教員が期待していた側面が一部機能しなかったようである。これは学習者を機械的に割り振ったことにも原因があると考えられるが、学習スタイルが異なる者同士の組み合わせは学習効果の面で問題があることが報告されており<sup>11)</sup>、今後はこの点にも注意を向ける必要がある。しかし、その一方でペア割り振りの相手を選ぶ作業は様々な要因によって機械的にならざるを得ない部分もある。2-1で指摘したように教員による学習者のコントロールが不可欠なことは勿論、学習者の学習スタイルを把握することは相当の時間と準備が必要であり、結果としてシラバスに従った授業運営の大きな妨げになる。ペア組み合わせは本プロジェクトにおいても重要であるが、その一方で限界もあると考える。

また、そもそもドイツ語初学者に発音をどの程度矯正する能力があるか、という問題も考慮しなければならない。本プロジェクトでは、学習者に発音の重要性を意識させるために発音テストの形態をとり、そのうえで学習者同士で発音を訂正し合うことを求めたが、この目的が完全に達成されたわけではなかった。この点について、上述したような組み合わせの問題以上に、学習者の発音能力を超えた課題であった可能性も検証しなければならない。

加えて、発音矯正の終着点をどこに設定するかという点も十分考えなければならない。より高度なレベルを目指すのであれば、指導・評価する教員にも音声学などの知識が必要不可欠と

なってくるが、筆者をはじめ全教員が身に付けているとは限らないのが実情である。また、初修外国語の枠組みのなかでどの程度発音を重視するかという点も議論の余地がある。コミュニケーション能力向上のために発音が重要なことは既に確認したが、限られたコマ数の中で文法や読解なども習得させる必要があることを鑑みると、発音指導に割ける時間は決して多くない。それゆえ、学習者の発音意識を改めることと並行して、効率的に発音を身に付けられる発音指導方法も模索する必要がある。

本稿では動画投稿サイト YouTube を活用したドイツ語授業について、発音テストの実践事例を技術的側面を中心に紹介してきた。発音は外国語学習の重要なファクターでありながら、学習意欲が高くないという背景がある。この点を踏まえ、学習者の興味関心を維持する目的で YouTube を用いた。実施に際し、スマートフォンの設定やアプリ使用方法、Google アカウント取得など手続きが多岐に渡ることを考慮し情報提示や練習時間の設定などを工夫したが、すべての学習者に浸透していなかった点は反省材料としたい。また、ペアの組み合わせに改善の余地があることも指摘した。プロジェクト授業の効果的な遂行のためにペアの割り振りは非常に重要であり、理想的には学習者の学習スタイルを考慮する必要があるが、授業実践においては限界がある。理想と実践の間にあるギャップを乗り越える方策も、今後考えていかなければならない。

#### 資料1：発音テスト実施要領<sup>12)</sup>

##### 【テスト内容】

テキストの音読を撮影→YouTube にアップロード→URL を教員に送付→視聴して採点

##### 【アップロード方法】

for Android

- ①カメラ起動、録画
- ②YouTube アプリ起動
- ③画面左上「YouTube」をタップ
- ④自分アカウント名をタップ（ログインしてない場合はログインを行う）
- ⑤右上2番目のアップロードをタップ
- ⑥ギャラリーから動画を選択
- ⑦プライバシーを「限定公開」
- ⑧右上2番目のアップロードをタップしてアップロード開始
- ⑨アップロードされた動画を選択、再生画面
- ⑩右上2番目の共有をタップ（ゴミ箱マークは削除なので注意！）
- ⑪キャリアメールや gmail 等から URL を送信（件名注意！以下参照）

「アップロード保留中」対策

→アップロード画面で①設定→②全般→③アップロード→④すべてのネットワーク

for iOS

- ①アプリ「YouTube Capture」インストール
- ②アプリ起動、撮影
- ③撮影終了後、自動でアップロード設定画面へ移行
- ④プライバシーの設定を「限定公開」
- ⑤右上アップロードボタンをタップしてアップロード
- ⑥URLを「クリップボードにコピー」、メールを開いて本文「貼り付け」、送信（件名注意！以下参照）

☆両者とも要 YouTube アカウント（gmail アカウントから作成可能）

【メール件名】

「曜日＋時限：学籍番号＋名前」（例【木4：文00-0000 齊藤公輔】）

資料2：発音テスト採点基準<sup>13)</sup>

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>• 基本点80点</li><li>• 母音間違い：－3点／1か所</li><li>• 二重母音間違い：－2点／1か所（上と合わせて計－5点）</li><li>• 子音間違い：－2点／1か所</li><li>• イントネーション良し：＋5点（語尾の上げ下げ、リズムなど）</li><li>• 発音間違い0：＋10点</li><li>• 英語アクセントなし：＋5点</li></ul> |
|--|

註

- 1) なお YouTube はアップロードした動画の公開範囲を3段階に分けて設定することが可能であり、このうち「限定公開」設定は URL を知っている人物にしか視聴できない。本プロジェクトは公開設定を「限定公開」にすることで、学習者のプライバシーに配慮した。
- 2) 島崎のぞみ、林良子、境一三：「ドイツ語母音発音の獲得に関する基礎調査」、『慶應義塾 外国語教育研究』第7号、2012年、75ページ。
- 3) 田中俊明：「大学2年生のドイツ語運用能力：授業改善と大学改革」、『言語文化論究』第9号、九州大学言語文化部、1998年、174ページ。
- 4) 同上。
- 5) 同上。
- 6) 吉井巧一：「リスニングと発音指導について」、『琉球大学欧米文化論集』第44号、2000年、23-24ページ。
- 7) 総務省 平成24年版『情報通信白書』（<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/html/nc122310.html>）（2013年7月29日アクセス）
- 8) 詳しいアップロード方法などは資料1を参照。
- 9) 使用教科書は次の通りである。伊藤直子ほか著：『ゲーテ・ライゼ!』、郁文堂、2012年／藤由順子

ほか著：『ヴンダー！ヴンダー！』、朝日出版社、2010年／佐藤修子ほか著：『スツェーネン1 場面で学ぶドイツ語』、三修社、2006年／佐藤修子ほか著：『スツェーネン2 場面で学ぶドイツ語』、三修社、2006年。

- 10) 次回プロジェクト時には、事前に授業支援システムの利用状況に関するアンケートを実施する予定である。
- 11) 河合靖：「外国語自律学習研究の3要素—動機づけ、学習スタイル、学習ストラテジー—」、『言語文化部紀要』第37号、北海道大学言語文化部、1999年参照。
- 12) 学習者に配布・掲示したものを一部改編。
- 13) 学習者に配布・掲示したものを一部改編。

本研究は2013～2015年度科研費基盤研究（C）（課題研究番号25370667）の助成を受けています。